

教 仁 名 聞

第 103 号
(発行日)

2019 年 4 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

アミダの中の生死

ギリシヤのソクラテス(前四七〇〜前三九九)の言葉としてエピクテトス(五十五頃〜一三五頃)が伝えているのを清沢満之師(一八六三〜一九〇三)が記しています。

その言葉に、

「ソクラテス氏曰く、我セサリーに行きて不在なりしとき、天、人の慈愛を用いて彼等を被養しき、今我もし遠き邦に逝かんに、天あにまた彼等を被養せざらんや」とあります。

ソクラテスが妻子を家において長期間遠方に出かける。そうすると、その間の妻子の生活はだれが面倒をみるのかという問題が出てきます。いわゆる生活問題です。ソクラテスのことですから蓄えも乏しかったでしょう。ところがその間、神様が他者をして彼等を養って下さった。神様の慈愛が働いて他の人たちが妻子の面倒を見てくれた、と。ところでソクラテスは若者を惑わしているという罪で死刑の判決を受けました。いよ

いよこの世を去っていかねばならない。遠き邦に去って行くことになった。その時の言葉としてこの言葉が伝えられているのでしよう。「天あにまた彼等を被養せざらんや」で、

セサリーに行つてたときと同じように、私がいなくなつても神様が他者を通して妻子を養ってくれることがあるのか、かならず養つてくれるであろう、と言われた言葉です。

わずか四十才で結核で亡くなったといった清沢師も残される妻子がどう生活をしていくのかという問題を持つていて、それに対してこのソクラテスの言葉に感銘を受けられたのでありましよう。師はこう言っています。

「我死せば彼等いかにして被養を得ん、と苦慮することなかれ。これには絶対他力を確信せば足れり。この大道は決して彼等を捨てざるべし」

と、ソクラテスと同じように言っています。妻子が自分で自活できれば自活し、できねば他の人たちの世話になつて

生きていくのであるう、それはみな絶対他力(如来)のお計らいである。この如来を信頼するばかりであつて、如来は決して彼等を見捨てないであらうと、この様に言つておられるのでありましよう。

そして清沢師は更に続けて「もし彼等到底これを得ざらんか、これ大道彼等に死を命ずるなり」とまで云つておられます。すなわち、誰からも援助の手が差し伸べられず、もし衣食を彼等が得られなくて、生きられなくなつたらどうするのか、とつきつめて問うのです。そしてその時は、彼等は死の縁をたまわつたのだから死んでいけばよいのである、とそう言われるのです。それも如来(大道)の計らいであると言われる。いわゆる生きるも如来の計らいによつて生き、死するも如来の計らいであると仰せられるのです。

こうした生活問題は妻子を養うことに限らず、自分自身においても同じ問題であつて、自分で働いて生活できる場合は良いとして、病氣や老化や貧窮などで自活できないときは、どうしたら良いのかというこの問題は何時の時代にもある問題でありましよう。これらについて、以下、清沢満之師の教えに学んでみたいと思ひます。

自分で生活できなくなれば、家族や他者とか公の支援によつて生きればよいのであり、現代はそれが一般でありましよう。しかしもしそれができなくて家の中で動けなくなつたり、他の人からの支援が受けられなくなつたりした場合

《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日 (月)

午後二時始

法話 岩 佐 幾 代 先生

* 同日 (四月二十二日) 午前十時・勤行法話

(念佛寺住職の法話です)

これが大谷派の先覚者清沢満之師の仰せです。徹底して

います。 養うことに限らず、自分自身においても同じ問題であつて、自分で働いて生活できる場合は良いとして、病氣や老化や貧窮などで自活できないときは、どうしたら良いのかというこの問題は何時の時代にもある問題でありましよう。これらについて、以下、清沢満之師の教えに学んでみたいと思ひます。 自分で生活できなくなれば、家族や他者とか公の支援によつて生きればよいのであり、現代はそれが一般でありましよう。しかしもしそれができなくて家の中で動けなくなつたり、他の人からの支援が受けられなくなつたりした場合

またじつとしておればいいといえる。じつとしていてこの世を終わらせていただく。

この点は養っている家族の場合も同じで、家族の中で自立して生活できない人がいて、その人を世話している者が亡くなるなり、世話をしている本人が老衰して世話ができなくなると、当然彼の世話は他者なり公的なるの支援を受けることになる。現代も多くはそういう形をとっている。ただもし、その支援さえ受けることができない場合はどうなのか。その場合は、その場所でじつとしていればいい。

そうすると衰弱してこの世を終わることになる。この世の縁がつきたのである。

以上は、清沢師の教えに従って受け取ってみました。

仏教では、この世を終わるのは善でもないし悪でもない。幸でもなければ不幸でもない。生まれた者は死ぬのであり、それは全ての生きとし生けるものの自然の相である。因縁によつて生き、因縁によつて死ぬのである。長寿が良いとも短命が悪いとも云わないのが仏の教えである。

しかもその上に『ダンマパダ』という經典には、

「不死の境地を見ないで百年生きるよりも、不死の境地を見て一日生きることのほうが勝れている。」

最上の真理を見ないで百年生きるよりも、最上の真理を見て一日生きることのほうがすぐれている」

と説かれています。

長寿であつても真理を知らずに生きるなら、それは空しい人生であり、たとえ短命であつても真理に出遇うならばその人生は豊かな実りを結んだのである、と云われるのであります。

人は皆、はかりないのちに於てあり、その中に生まれ、その中で生を営み、その中でこの世の生を終わっていきまなさいのちすなわちアミダ仏であります。これに関して『ダンマパダ』には、

「へわたしには子がある。私には財がある」と思つて愚かな者が悩む。しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか」

と説かれています。自分も子供もそのいのちは自分のもの（所有物）ではない。我が

子といえども我がものではない。それはアミダのいのちのものであると聞かされる。

親と子はアミダ仏のいのちの上、いのちの中で、極めて親しい縁があつてともにこの世で生きている者であるといえよう。

ですから私にもアミダ仏はともにいて下さり、我が子にも妻にも他者にもアミダ仏はともにいて下さる。

アミダ仏は「汝をどこどこまでも救わずにはおかない」と南無阿弥陀仏となつて喚びかけて下さっている。私の今にも共にいて下さり、私どもに幸せを与えようとし、助けようとし、私たちの罪を担い、浄土に生まれさせると決定して、「我は汝の全責任を引き受ける」と仰せ下さっているのであります。

アミダ仏は一人一人に「そのままなりでタスケル」と喚びかけ、「我、汝のいのちの主なり」とお知らせ下さるのであります。我が子の行く末の責任はアミダ仏が担つて下さる。アミダ仏が寄り添つて下さつていて、一人一人を救うべく働いて下さっている。

その上で他者に関しては、自分のできることをさせてい

ただくのであります。自分と自分でできる援助をさせていただくのであります。

ただ、へ私が人を真に救うこと、人を真に幸せにすることへはできない。そういう限界に生きている者なのです。自分ができることまで無理に手を出そうとすると自らをいたずらに苦しめることになりかねません。

大谷派のスローガンに「今、いのちがあなたを生きている」とありますが、私もあなたも彼も、そのいのちの主体ははかりなきいのちのアミダ仏であります。

ただそれに気がつかずに流転しているのです。その流転の私にへ南無阿弥陀仏となつて喚びかけて下さり、アミダ仏と私の切つても切れない結びつきに目覚まして下さる、そのアミダ仏の喚び声、それがナムアミダブツのお念仏であります。アミダ仏との結びつきこそ私たちがいのちの底から願つている事柄であり、生の意味が全うする真実なのです。

なお国の政策の歪みや世界の動乱などでの経済的な困窮とか公的援助の停滞とか、さ

まざまな社会的な問題や課題が何時も山積みです。それらが全部解決しなければ、人は安心して生きることができないということもその通りであります。それ故、これらの問題に対して個々人が少しづつなりとも善処していくべき勤めがあります。

ただ未解決で問題だらけの世の中を生きかつ死んでいく一人一人、その一人一人にアミダ仏がいのちの主としてましますこと、アミダ仏に私ども私たちも携め取られているという真実にあうと、その真実は問題だらけの世の中を絶望せずに生きる私たちの支えになり、安らぎになり光になつて下さることは疑うべくもない恵みです。

(了)

（遠方法話予定）

○四月二十一日。福井市 浄尊寺。

午前・午後。法話

○四月二十九日。姫路市 西源寺。

午後。法話

○五月四日。福井別院。福井二組

門徒研修。午前。法話・座談

○五月九日。名古屋市。高畑会館

午前。法話・座談

○六月一日。福井別院。福井二組

門徒研修。午前。法話・座談

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

至心信樂欲生と

(和讃問答)

至心発願欲生と

十方衆生を方便し

衆善の仮門ひらきてぞ

現其人前と願じける

(浄土和讃)

現代語意識 (法蔵菩薩は、自力執心の深い私たちをあわれと思われ、そういう者を真実の道に導かんが為に、心から助かりたいと願って浄土に生まれようとおもって善行をなすものは臨終の時に菩薩たちと迎えに来よう、との第十九願を建てられた)

(語句)

至心―至れる心、すなわち真実心。

発願欲生―善根を回向して浄土に生まれようとする事。

衆善―衆多(多くの)善根(行)。

仮門―如来の真実に導き入れる為の仮の教え。

ひらき―道を開くこと。十

九願を建てること。

現其人前―その人の前に現れる。臨終に仏や菩薩方が、臨終にその人の前に現れるこ

とで、臨終来迎のこと。

* * *

N 「この和讃はどういうことについて詠われたものですか」

D 「第十九願についてです」

N 「十九願とは」

D 「仏説無量寿経の四十八願の中の第十九番目の願です。それは

たとい我、仏を得んに、十方衆生、菩提心を発し、もろもろの功徳を修して、心を至し願を發して我が国に生まれんと欲わん。寿終わる時に臨んで、たとい大衆と圍繞してその人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。

とあります。現代語訳では、

「わたしが仏になるとき、すべての人々がさとりを求める心を起こして、さまざまな功徳を積み、心からわたしの国に生まれたいと願うようなら、命を終えようとするとき、わたしが多くの聖者たちとともにその人の前に現れることにもなるでしょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません」となっています」

N 「そうすると(至心発願欲生と)というのは、心から助かりたいと願い、アミダ仏の浄土に生まれたいと思つてさまざまな善を行おうとすることなのですね」

D 「ええそうです。そのように願つて諸々の善き行いを積んで浄土に生まれようと真面目に励む、そういう人が亡くなる時には菩薩たちと来迎して目の前に現れるようにしてやりたい、もしそれができないようならわたしは仏に成らないとの法蔵菩薩の誓いです」

N 「十八願では(ただ称えるばかりで浄土に生まれさせる)とまで誓つて下さった法蔵菩薩がなぜ十九願を建て、真面目に諸善諸行を行つて浄土に生まれようとするものを浄土へと導こうとされる願を起さなければならぬのですか」

D 「十八願によつて一切衆生をそのままなりでアミダ仏の大悲の願力だけで救うと誓つて下さるのですが、この十八願を聞いてもそれを(我が身をまるまる助けて下さる広大なお誓い)と信受できず、十八願を疑い、受け入れない衆生が多いであろうとアミダ仏はすでに知り抜いて下さつていて、そういう衆生をなお十

八願のお助けに導き入れるためのお手立てとして誓つて下さったのが十九願です」

N 「それゆえ十九願を(方便仮門)といわれるのですね。

なぜ十八願を聞いても私たちが多くはそれを疑い受け入れないのでしょいか」

D 「私たちは己の限界を知らず邪見(きょうまん)の心に覆られてい

るからです」

N 「邪見(きょうまん)とはどういう心ですか」

D 「自分で自分を助けようとする心です。自分で自分をコントロールしていけば自分を変えることができ、そのようにして浄土に生まれようとし、自分を救うことができると思う、そこにあるのは(傲慢)心です」

N 「真実を自分の方から掴むことができるという、いわば自分の能力や心を過信し信賴しているのですか」

D 「ええ、ですからアミダ仏が南無阿彌陀仏となつて(我にまかせよ)と仰せ下さつても、一向にその人に響かない。

(ああ、こんな私のためでありましたか)とアミダ仏の大慈悲心がいただけなのです」

N 「アミダ仏の大慈悲心が感じられませんか、いつまでたつてもアミダ仏とであえないのですか」

いのですか」

D 「ええ、大悲の心が知られませんから、大悲の心は我が心に流れてこないのです」

N 「大悲の心が届いて信心となつて私に發起してくるので

すね」

D 「ええそうです。大悲に至りて我が信心になりたもうのです」

N 「そのように邪見(きょうまん)の心に覆われて、弥陀のまるだすけの本願をいつまでも受け入れない衆生が残るのですか」

D 「ええ、残るのですね。この衆生をどうするか。そこに思案を重ねて、そういう衆生を見捨てず、お手立てして十八願に導こうとして誓われたのが第十九願です」

N 「そこで(菩提心を發し、もろもろの功徳を修)する者を、と誓われたのですか」

D 「真実に遇いたいと願いながら、自分の自力にとらわ

れている者に(もろもろの善き行いを修して行く者を臨終には仏菩薩が迎えに行こう)とて、見捨てず救いの手がかりをつけたもう願です」

N 「だから、十九願を仮に建てたお手立てといわれるのですか」

D 「ええ、繰り返しますが、

『如来の御名』(下) 佐々木蓮磨

(前号より続く)

アミダ仏の真意は十八願に帰順させたいのですが、自分自身を憑みにし、アミダを憑まない自力執心の者に「諸々の善根を積んで浄土に生まれようと願って善根功德をおさめる者」に誓いかけてアミダ仏の救いへと導こうとされる。このような道を歩むことによつて自力疑心の行者も「浄土に生まれることができるような自分ではない。自分を浄化することもできない。わが力及ばず」と、煩惱の深く愚かな凡夫であることが身にしみて知らされてくるのです」

N 「自己能力の限界を身に感じざるを得なくなるのですね」
D 「ええ、そういう風に自分を尽くさせて自分の能力の限界に気づかせようとの仮のお手立てとして建てられたのが十九願なのです」

N 「十九願によつて、自らの無知無能、煩惱ばかりの凡夫心を知らされて、いよいよ阿弥陀様に助けられる外は無いと知らされるのですね」

D 「そういう行き届いたご方便の願なのでですね。それほどまでにアミダ仏はどこどこまでも衆生を見捨てられないという大悲のお心が知らされません」

す。

これが真宗に立つる名体不離の謂れであつて、名号を本尊とせねばならぬ根拠があるのであります。

そこで、名号を抜きにして画像、木像を拝んだり、また徒らに高遠な真如の理談を弄ぶならば、真宗の根本的立場を失い、偶像崇拜、神秘主義、又は、観念遊戯に墮することを反省したいと思いません。世に見佛見神を語る人がありますが、これ等も真宗の立場からすれば人間の幻覚として捨つべきであります。

また如来の御名には万善万行が具足していると説かれることも、どうかすると物量的、または神秘的な見方に陥り易いのです。即ち名号を咒文の如く考え、名号の文字そのものに神秘的な功德が封じ込まれていると見るものです。

この見方から念佛廻向の思想が生まれ、やがては追善供養や災難除けの御守りにまで発展することになったのです。こうなつては宗祖の精神は全く抹殺されてしまいます。如来の御名に無上の功德があるといふことは、御名の意義を聞くことによつて、真実の自覚に立つ以外にはありません。

聞名の一念に助かり、一声の念佛を要としない一念業成の義は自覚を離れては了解することが出来ません。

聞を抜きにした名号と、自覚なき功德とは、宗祖の立場から排せらるべきであります。三部経の読誦を御止めになつた宗祖の御反省は、正しく今日の宗門人の反省でなくてはなりません。

蓮如上人が「南無ノ二字ハ聖人ノ御流ニカギツテアソバシケリ」と仰せられたことも、名号の意義を自覚の上に見られた宗祖聖人の御立場を一言で宣明されたものと頂きます。説教の上などで、よく「タノム機までも六字に仕上げて」と気安く辯じますが、その言葉が自覚への誘導とならぬ限り百害あつて一利なき結果に終るでしょう。

宗祖が光明名号の因縁を具さに説きながらも、なお最後に信心の業識(自覚)を強調されねばならなかつた思召を見逃してはなりません。

かように如来の御名には衆生を転迷開悟せしめる当為と

必然(大慈悲)が具備されていますから、これを具体的に、また歴史的に表現されたものが、法蔵菩薩の願行ではないでしょうか。そこで宗祖は「一

如宝海ヨリカタチヲアラハシテ、法蔵菩薩トナリタマヒテ、無碍ノチカヒヲオコシタマフ」と御示しになつております。

しかし自覚(信心)を本とする真宗に於ては聞名の一念に法蔵の願行は物語でなくなり、生きた自覚内容となつて、現実に実践されねばなりません。自覚なき実践は妄動ですが、実践なき自覚は一つの觀念に過ぎないでしょう。

古来、真宗の行信論は随分やかましく論ぜられて来たようですが、「自覚は実践に於てある」という一語で解決がつかぬのではないのでしょうか。信即行、行即信です。

ここに十七、十八の二願は现实生活に生き「御名を聞きつつ称え、称えつつ聞く」という聞法讚嘆の実践行動となつてくるでしょう。蓮師は「仏法ハ讚嘆談合ニキワマル」と仰せられました。

如来の御名とは真実の言葉であり、覚者の叫びであります。この御名が真に生かされる世界は聞法のほかにありません。

(了)

(了)